原　著

地域活動参加者が見守りを意図して実践する独居高齢者への関わりの実態

金森弓枝*，大河内彩子*，谷川千春*

Actual conditions of involvement with elderly people living alone as practiced by community activity participants with the intention of watching over them.

Yumie Kanamori *, Ayako Okochi *, Chiharu Tanigawa *,

Abstract: Currently, with an increase in the number of elderly people living alone in Japan, watchful waiting for people to come and meet them is becoming popular. This study aimed to examine the involvement of community activity participants in caring for elderly people living alone. We conducted semi-structured interviews with six individuals who regularly participate in community activities. The participants were asked about their thoughts when interacting with elderly people living alone. Data were analysed using the qualitative synthesis approach (KJ method). Results suggested that participants in community activities always had a deep-rooted〔health craving〕 and 〖worry〗 about elderly people living alone. Further, as part of their community activities, they were 〔naturally checking on the safety〕 of the residents by 〖interacting〗 with them to avoid the feeling that they were just being watched over. They were also being 〖considerate〗 to 〔not overstep their privacy〕. Thus, a 〖change〗 in the way 〔elderly people living alone being watched over increased their awareness〕 thereby transmitting their own vitality. This led to the establishment of 〖relationships〗 among the participants, where 〔everyone maintained contact with each other on a daily basis〕. These findings suggest that engaging with elderly people living alone is not one of individual creative involvement but one in which the group engages with and enhances each other. Public health nurses need to empower the group.

Key words: Elderly people living alone, Community activity participants, Watching over

受付日　2023 年 10 月 20 日　採択日　2023 年 12 月 18 日
*熊本大学大学院生命科学研究部
投稿責任者：金森弓枝　yumiek@kumamoto-u.ac.jp

Ⅰ．緒言

現在,わが国では高齢者数が増加し,単独世帯高齢者,いわゆる独居高齢者の割合も増加している [1].65 歳以上人口に占める独居高齢者の割合は約 29%(令和 2 年)で,令和 18 年には約 33%に上昇する見込みである [2].このような状況下,独居高齢者は,将来,病気や要介護状態になることへの心配を半数以上が抱えるとともに,病気や事故などで生活スタイルに変化が生じることを不安視していると言われている [3].日常生活自立度の観点から独居高齢者の将来予測をみると,その低下は家族等の同居者がいる高齢者に比べて大きい [4,5].また,抑うつ傾向にあること [6,7]や物忘れがある者の割合が高いこと [8],緊急対応のための自己管理の必要性 [9]があることなど,身体的側面のみならず精神的・社会的側面からも独自の健康課題を抱えていることが分かっている.そのため,65 歳以上の独居高齢者に対して民生委員や地域のボランティア等による見守り活動が行われているが,1 人の人員が抱える件数が多いことや訪問しても拒否される場合

があること,断片的な関わりに留まってしまうことなどの課題が挙げられている[10].

一方で,現在,出てきてもらう見守りが注目されている.独居高齢者の7割は自立しているという調査結果[8]もあることから,家に閉じこもることなく出会いの場に定期的に出てきてもらい,近隣とのふれあいや仲間づくりができる交流の機会の中で対象者の安否確認をしようという考え方である.総務省における一人暮らし高齢者に対する見守り活動に関する調査(令和 5 年 7 月)によれば,北海道や広島県内等の複数の地区でサロンを通じた見守り活動が実践されている[2].独居高齢者が地域活動に参加するアウトカムとして友人や知人が増えて,交流が広がるといった互助関係の構築や QOL の高さ等が明らかになっており,地域活動に独居高齢者が定期的に参加することで見守りの実践を行っていくことは,高齢者の健康状態の維持向上の観点からも重要である[11-14].

他方で,地域では,保健師や社会福祉士,介護支援専門員などの様々な保健医療福祉職が独居高齢者支援に携わっているが,個別支援と集団支援(地域活動支援)の両方を業とする保健師は出てきてもらう見守りにおいてとりわけ果たす役割が大きいと考えられる.保健師は地域活動支援を行う際,グループの発達段階や成熟度をアセスメントしていく.そのため,グループの中で出てきてもらう見守りがどのように行われ,どんな効果を生んでいるのか把握し,その上で地域活動の発展と出てきてもらう見守りの双方を促進して,独居高齢者支援を充実させていく必要があると考える.しかし,地域活動の中で参加者による独居高齢者の見守りがどのように行われているのか,その実態や効果を具体的に示す知見はほとんど見当たらない.独居高齢者はできるだけ長く自分のライフスタイルで単身生活を維持したいという意思を有しているため[11],保健師には独居高齢者支援を一層充実させ当該高齢者が望む生活を長く続けられるよう支援することが求められている.そこで,本研究は地域活動参加者が見守りを意図して行う独居高齢者への関わりの実態を明らかにすることを目的とする.このことは,地域で活動する保健師等の保健医療福祉専門職が独居高齢者支援を行う際の一助となる.

II. 方法

1. 調査対象者

今回,調査対象者のリクルートにあたり,A 市の B 地区福祉会に周知協力を依頼した.A 市は人口約 10 万人,高齢化率は 29%で,政令指定都市のベッドタウンとして 40 年ほど前に新興住宅地が切り開かれた地方都市である.対象は,定期的に地域活動に参加している者6名であり,研究の趣旨に理解を示した者に対し,口頭及び紙面にて,研究の目的や方法,個人情報の保護,研究協力途中撤回の権利等について説明を行い,同意を得た者とした.

2. データ収集方法

調査対象者6名に半構成面接調査を行った.面接では,地域活動の際に見守りの観点から独居高齢者にどのような関わり方をしているか明らかにすることを目的に, どのような声かけをしているか,関わりの中で留意していることは何か,これまでの関わりが独居高齢者の健康や生活に役に立ったと感じた経験などを尋ねた.インタビュー時間は最短 33 分～最大 55 分の平均 47.5 分で,内容は本人の同意を得た上で録音し,逐語録を作成した.

3.分析方法

分析には,質的統合法(KJ 法)を用いた.質的統合法(KJ 法)は,川喜田二郎氏が開発・体系化した「KJ 法」をベースとして,山浦[15]がその基本理念と基本技術に準拠しながら看護領域の研究者とともに積み重ねてきた看護実践の中から形を成している[16].質的統合法は,まず各事例固有の「個性・独自性」が把握されるとともに,普遍性・法則性に繋がる「論理」が把握されることで,事例の実態を把握できるとされる個別分析を行うとともに,当分析で得られたラベルを総合分析に使用し,総合分析は,個別分析の事例から普遍性・法則性へ近づくプロセスとされる.本研究では,独居高齢者への関わりの実態を現象学的に明らかにすることを目指しており,当方法が適していると判断した.

総合分析の手順は,次のとおりである.まず対象者 N1～N6 の個別分析から得られた最終ラベルより 2 段階下のラベルを集め,総合分析のデータ(元ラベル)とする.当分析では,N1 から 10 枚,N2 から 14 枚,N3 か

ら 15 枚,N4 から 10 枚,N5 から 14 枚,N6 から 14 枚で,合計 77 枚の元ラベルとなった.次に,ラベルのすべてに目が行き渡るよう一面に広げ,ラベルの文章全体で訴える意味の類似性に着目して 2～3 枚集めてグループ編成し(図 1),グループの意味を表現する文章(1 段目の表札)を考え記述した.これをグループ編成プロセスの 1 段階とし,2 段目表札,3 段目表札の作成というように同様の作業を繰り返し,段階ごとに抽象度を上げ,ラベルの枚数が最終的に 5 枚になるまで行った.ラベル番号は,1 段目を「A001」,2 段目を「B001」,3 段目を「C001」のように表示し,どの段階のラベルかが常に検証できるようにした.その後,最終ラベルの関係性に着目して,テーマに対する関係性を探り,最終ラベルの訴える内容が意味上で最もわかりやすく,落ち着きのある相互関係になるように配置した(空間配置).また,それぞれの最終ラベルが意味するところをシンボルマークとして付けた.シンボルマークは,【事柄：エッセンス】の 2 重構造になっている.その上で,ラベル同士の関係性を関係記号や添え言葉で示し,最終的に出来上がった図解について,論理的に叙述化した.

なお,分析のプロセス及び結果の妥当性については,公衆衛生看護に卓越した専門家とのディスカッションや研究責任者の質的統合法(KJ 法)研修会への参加により担保している.

4. 倫理的配慮

研究者は A 市の B 地区福祉会に文書と口頭にて,対象者への広報を依頼し,文書にて承諾を得た.その後,同会に,文書を用いて対象要件を満たす者に広報していただき,研究協力の意思を持った者から研究責任者に直接連絡を受けた.その上で,対象候補者に対し,研究目的や方法,個人情報の取り扱いと保護,研究への参加は自由意思によるものであること,協力に同意後も自由に協力を中止し,同意を撤回できること等について紙面と口頭で説明を行い,研究協力の同意が得られた 6 名を本研究の対象とした.また,インタビューは,対象者の希望に合わせ対象者宅や公共施設の個室等で実施した.なお,日本赤十字九州国際看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した.（承認番号 18－023）

Ⅲ．結果

1.対象者の概要(表 1)

対象者は,男性 3 名,女性 3 名の計 6 名で,年齢は最少 59 歳,最高 79 歳で,平均は 71.5 歳であった.参加している地域活動の内容は,高齢者サロンや老人クラブ,体操教室などであった.

表 1 対象者の概要

対象	年齢	性別	地域活動	活動頻度
N1	72	女	老人クラブ	月1回
N2	64	女	サロン	月1回
N3	80	男	健康体操教室	週１回
N4	59	女	音楽カフェ	月３回
N5	79	男	健康体操教室	週１回
N6	75	男	お宮掃除の会	月１回

2.分析結果

1)シンボルマークと図解の叙述化

77 枚を元ラベルとしてグループ編成を 5 段階まで行った結果,最終ラベルは 5 枚となり,これらに各シンボルマークを付けた.シンボルマークは,【心配：健康を切望】【交流：自然に安否確認】【配慮：プライバシーに踏み込みすぎない】【変化：見守られる人の意識の高まり】【関係性：誰もが互いの様子を日頃から把握】であった. また,当分析のデータとなった N 1 ～N6 のラベルがどのシンボルマークの元になったのかという関係を表 2 に示した.次に,【シンボルマーク】の〖事柄〗と〔エッセンス〕を用いて,得られた図解(図 2)について叙述化する.

地域活動参加者は,いつも根底で自他の〔健康を切望〕し独居高齢者のことを〖心配〗していたが,地域活動ではいかにも見守りという感触の声掛けにならないよう〖交流〗の中で〔自然に安否確認〕を行っていた.また,健康を切望するあまり心配な気持ちが先行しすぎないよう気を払い,〔プライバシーに踏み込みすぎない〕ための〖配慮〗を行っていた.その結果,〔見守られている人の意識の高まり〕が起き,見守られる人自身も積極的に自ら元気であることを発信するようになるといった〖変化〗が見られた.すると,参加者の〔誰もが互いに様子を日頃から把握〕し合うといった〖関係性〗が構築された.以上が,地域

活動参加者が独居高齢者に見守りを意図して関わる実態の構造である.

表 2 総合分析のシンボルマークと個別分析からのラベル数

総合分析の【シンボルマーク】	個別分析 元ラベル数					
	N1	N2	N3	N4	N5	N6
【心配：健康を切望】	0	5	4	0	3	4
【交流：自然に安否確認】	2	4	4	0	0	2
【配慮：プライバシーに踏み込みすぎない】	2	3	3	3	4	1
【変化：見守られる人の意識の高まり】	3	0	0	2	0	2
【関係性：誰もが互いの様子を日頃から把握】	3	2	4	5	7	5
合　計　数	10	14	15	10	14	14

2)各シンボルマークの意味

次に,各最終ラベルと下位ラベルを示しながらシンボルマークについての説明を行う. 最終ラベルは＜　＞,下位ラベルは「　」とし,末尾には(ラベル No.)を提示している.

【心配：健康を切望】

最終ラベルは,＜活動に来ない人がいて倒れているのではないかと心配するときも,みんなに飽きずに会に来てもらうために努力や工夫をするときも根底にあるのは自他の健康を願う気持ちである(E001).＞となった.これは,「人とおしゃべりしているときも,会に誰かが来なくて倒れているのではないかと心配な時もいつも考えのベースにあるのは自他の健康への不安である(C007).」「いつもは会に来るのに来ていない人がいると,具合が悪いのではないか,倒れているのではないかととても心配になる(B006).」などの下位ラベルから構成された.

【交流：自然に安否確認】

最終ラベルは,＜出てきてもらうことによって,いかにも安否を確認しているような声掛けではなく,顔を見て喋ったり学び合う交流を通して自然に見守りができている(E002).＞となった. これは,「出てきてもらう見守りの良い点は,いかにも安否を把握しているような声掛けにならずとも自然に様子が把握でき,何かあったとときに頼ってもらうことに重点を置いた言葉かけをしやすいところだ(C004).」「1 時間の体操の会の中でもあえて 15 分間健康をテーマに雑談を行い,顔を見て交流することは,互いに言葉を交わしたり学び合うなどの有意義な時間になっている(B009).」などの下位ラベルから構成された.

【配慮：プライバシーに踏み込みすぎない】

最終ラベルは,＜会の在り方が地区の方針に左右される場合もあるが,一人暮らし高齢者の見守りは,本人の意向や信念に配慮しプライバシーに踏み込みすぎないよう気を付ける必要がある(E004).＞となった. これは,「出てきてもらう見守りであっても,会を休むときに休みの連絡はしなくて良いことにしたり,見守りを余計なことだと思う人がいたりすることに留意したりと相手に踏み込みすぎない配慮に気を付けている(C006).」「一人暮らしの人は地域に迷惑をかけないといった信念や自信を持っている人が多いと感じるが,家族が近くにおってもそんなに手伝ってももらえないだろうからと思い,接し方に葛藤する(B004).」などの下位ラベルから構成された.

【変化：見守られる人の意識の高まり】

最終ラベルは,＜出てきてもらう見守りでは,見守られる側も会に参加する意味を自ら意味づけして積極的に行動したり,行動目標を立てて生活するようになるなど変化していく(D005).＞となった. これは,「地域には調子が悪くても積極的に見守られる側から発信しようとする人がいたり,家におってもしょうがないと思う人が増えてきたりしていて,出てくる人も少しずつ増えている(B007).」「会に参加している人達は,話すことで認知症の予防になったりするので家にこもったりせず出てきてもらうよう声をかけることが大事だと認識している(A034).」などの下位ラベルから構成された.

【関係性：誰もが互いの様子を日頃から把握】

最終ラベルは,＜活動で定期的に顔を合わせることによってメンバーの誰もがお互いに日頃から様子を把握している関係性ができている (E003) .＞となった. これは,「会で定期的に顔を合わせる人たちについては,メンバーの誰かが急に会を休んだとしてもいつどこで見たなどの情報がどこからともなく出てくるくらい日頃から把握し合う関係性ができている (C003) .」「会で知り合った人たち同士は,別の集まりの時でも自然とお互いの様子を気に掛けるくらいの深いつながりになっていて,自分のことも心配してくれていると実感すると励みになる(A031).」などの下位ラベルから構成された.

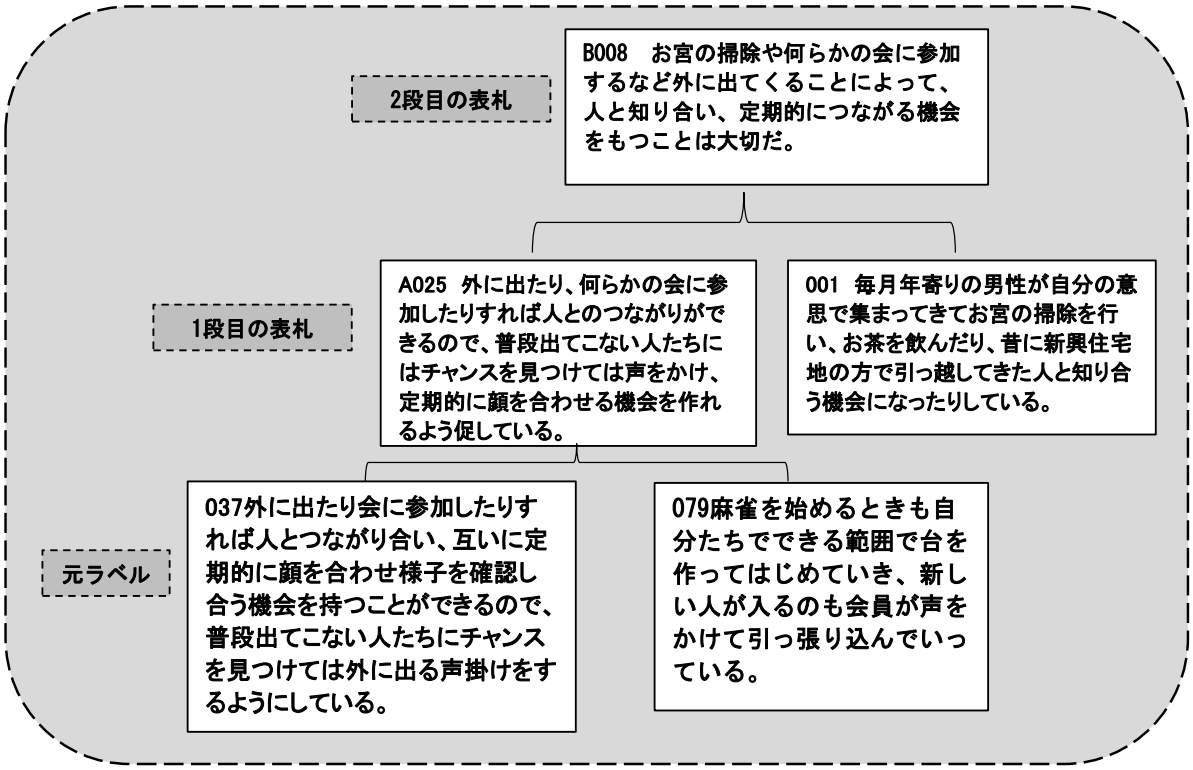

図 1 グループ編成例

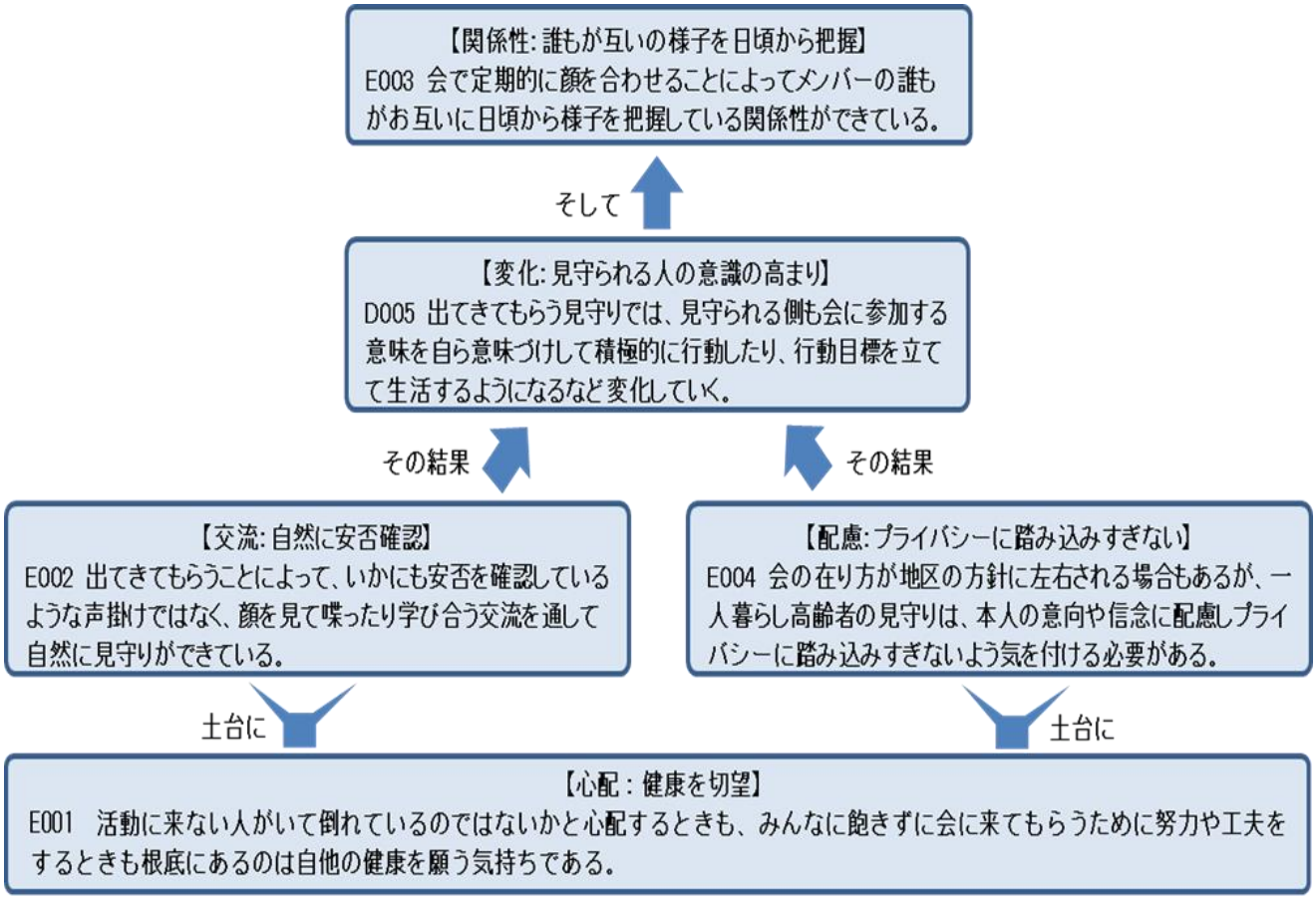

図 2 地域活動参加者が見守りを意図して実践する独居高齢者への関わりの実態

Ⅳ．考察

これまでの独居高齢者を対象にした地域活動に関する研究では,活動への参加により友人や知人が増え[17]交流が広がる[18]ことは述べられていたが,見守り実態について明らかにした文献はなかった.だが,本研究では, 地域活動参加者は,いつも根底で自他の健康を切望し独居高齢者のことを心配しつつも,地域活動ではいかにも見守りという感触の声掛けにならないよう交流の中で自然に安否確認を行っていることを明らかにした.また,見守りにあたっては,プライバシーに踏み込みすぎないための配慮をしていることや見守られている人の方にも意識の高まりが起き,相互作用の中で誰もが互いに様子を日頃から把握し合う関係性になっていくことを示した.出てきてもらう見守りの特性という観点で以下に考察する.

第一に,出てきてもらう見守りでは交流を通して自然な形で安否確認が実施できる点である.本研究の結果から,出てきてもらう見守りにおいては,いかにも安否確認をしているという感触を与えずに,顔を見て喋ったり交流したりするという成り行きの中で自然と安否確認できていることがわかった.一方,訪問による見守りは,独居高齢者との接触目的そのものが安否確認になるため,自然な成り行きの中でさりげなく見守りを行うという状況が発生しない.そのため,対象者が強く拒否したりすることもあったり,認知症の人の対応に苦慮したりするなど専門的な知識が不足していると感じるほどの負担感がのしかかっている[10].加えて,訪問人員の不足や経験の少なさ[10]も見守り活動における負担と不安を増大させている.本研究の結果と照合すると,出てきてもらう見守りは交流という空間の中で図らずも安否確認ができるので,見守る側も見守られる側も負担を感じにくいことが訪問による安否確認との差異ではないかと考えた.看護師のコミュニテーションスキルについて研究した杉山は,基礎的コミュニケーションスキルが向上することで援助的コミュニケーションスキルも向上する可能性を示唆している[19].地域活動での見守りは看護ケアではないものの,潜在的に見守る人と見守られる人という意識は双方にあると考えられ,出てきてもらう見守りの場合は何気ないおしゃべりや体操などを通して基礎的コミュニケーションを取りやすい環境が発生するため,援助的コミュニケーションも図りやすいものと考えられる.

第二に,見守られる人にも変化が認められる点である.本研究では,プライバシーに踏み込みすぎないという配慮をしつつ自然な成り行きの中で見守りを行うことによって,徐々に見守られる人の意識が変わっていた.具体的には,休まずに活動に参加できるよう行動目標を立てるなど,休まないということを通して見守られる人自身が積極的に元気であることを発信してくれるようになっていた.見守られる人の変化について研究したこれまでの論文では,認知的な異変,すなわち低下[10]に違和感を覚え対応したケースなどの検討が多い.訪問による見守りの場合は,見守り対象者自身は自宅に籠っている場合が多いため,心身の状況が向上していく例は少ないと推察できる.しかし,出てくることで見守られる人は,交流を通した安否確認の積み重ねの中で自分から発信する意義に気づき,見守られることへの必要性に対する意識と行動が向上している.大門は,社会参加と精神,心理機能の関係について,人は生涯を他者との関係の中で過ごし,共感や相手のためになるような行動を通して良好な対人関係を構築し,社会や文明を作り出してきたと述べている[20].本研究の対象者は,交流という機会を通して見守りを行うことで,見守る側と見守られる側の双方が共感し,相手にためになる行動をしようという意識が高まったのではないかと考えられ,出てきてもらう見守りという社会の在り方を作り出しているのではないかと考えられる.

第三に,集団全体すなわち参加者みんなで見守る関係性と仕組みが自然発生的に構築されている点である.先行研究では,参加することで顔なじみの関係になり,単一のサークルやサロンという範囲内においてお互いを気に掛け合う関係性になることは明らかになっていた[18].しかし,本研究では,所定の活動の範囲を超えて別の活動などにおいても日頃から誰もがお互いに様子を気にかけあう関係性が醸成されていた.そしてその関係性の中で,独居高齢者への関わりも行われていた.訪問の場合は,個別の対人関係になるため,全体の関係性の中で,みんなで見守るとい

う状況は発生しない.しかし,出てきてもらう見守りでは,グループダイナミクスが働き,自ずとお互いを気に掛け合うようになり,出てもらう見守りに関する参加者全員の能力がエンパワメントされている可能性が考えられる.尹は,認知機能と関連する身体機能は,巧緻性,下肢筋力,歩行能力,反応能力だと述べている[21]. また,地域活動に参加する高齢者は参加しない高齢者よりも全体的健康感が高いとの報告もある[22] .出てきてもらう見守りは,参加者をエンパワメントし,自律的意識を導いていると考えられる.そのため,見守りをベースに構築された関係性は,見守りの域を超えて参加者の心身機能の維持にも貢献する可能性が示唆された.

以上のように,地域活動参加者が見守りを意図して実践する独居高齢者への関わりの実態は,個別に創意工夫を行うような関わりではなく,集団全体で互いに高め合いながら関わっている様相であった.このことから,健康増進を期待し,地域に出てきてもらう見守りを普及するためには,独居高齢者支援は個別支援に留まらず,集団をエンパワメントしていく必要性が示唆された.地域活動のプロセスの中で生じる相互交流は,共同体としてのコミュニティ形成の基盤になるとともに,エンパワメントの原動力になるとされる[23].そのため,個別支援と集団支援の両方に対しエンパワメントのスキルを有する保健師は,独居高齢者支援において果たすべき役割が大きいと考える.よって,保健師は参加者や関係者間の情報共有,参加者の活動状況ならびに心情などの実態を適切に把握し,必要に応じて行政などとの協働を促し,地域組織の成長による活動の拡大と創出[24]を念頭に出てきてもらう独居高齢者支援の推進に寄与していくことが求められる.

Ⅴ．研究の限界

本研究では,老人会やサロンなど組織の種別は問わず,公衆衛生看護学上の観点から健康課題の解決を目的に活動する組織を地域活動と捉え研究した.そのため,組織の種別によって結果に異なりがあるのか等までは,見出すことはできていない.また,対象者は6名であったが男女比,各対象のテーマに対する背景や考え方の違いなどから意見のバラエティは捉えることができ,一定程度の飽和状態にはなったと判断した.しかし,これらは,同一地区の居住者に限られており,地域特性による偏りがある可能性がある.そのため今後はより対象地域を広げ,それに連動して対象数を拡大し,更には必要に応じてグループ種別を分ける等詳細な検証を行っていく必要がある.

稿を終えるにあたり,本研究にご理解とご協力をいただきました A 市 B 地区の皆様及び関係の皆様に心よりお礼申し上げます.また,本研究にご協力いただきましたすべての皆様に感謝の意を表します.

本研究は,JSPS 科研費 18K17663 の助成を受けたものです.なお,本研究は開示すべき COI はありません.

文献

1) 内閣府: 令和元年版高齢社会白書, 第1節 高齢化の状況（3）. https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/html/zenbun/s1_1_3.html ［2023年10月20日閲覧］
2) 総務省: 一人暮らしの高齢者に対する見守り活動に関する調査結果報告書. https://www.soumu.go.jp/main_content/000892187.pdf ［2023年10月20日閲覧］
3) 内閣府: 令和元年版高齢社会白書. 第3節 一人暮らし高齢者に関する意識. https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/zenbun/s1_3_1.html. ［2023年10月20日閲覧］
4) A R Sarwari, et al: Prospective study on the relation between living arrangement and change in functional health status of elderly woman, Am J Epidemiol, 147; 370-378, 1998.
5) Saito E, et al: Changes in functional capacity in order adults living alone; a three ‐year longitudeinal study in a rural area of Japan, Nihon Koshu Eisei Zasshi, 51; 958-968, 2004
6) 斉藤恵美子,他: 一人暮らし高齢者の生活を支える町の実践, 公衆衛生, 66; 51-53, 2002.
7) 上田雪子: 地域在住一人暮らし高齢者の精神的

健康を高める要因と支援の在り方, 地域総合研究, 4　7; 1-13, 2020.
8) 本田亜起子,他: 一人暮らし高齢者の自立度とそれに関連する要因の検討, 日本公衛誌, 49; 795-801, 2002.
9) 工藤禎子: 一人暮らし高齢者の地域での生活における安全の確保, 老年社会科学, 37; 36-41, 2015.
10) 斉藤千鶴: 地域活動参加者が見守りを意図して実践する独居高齢者への関わりの実態関西福祉科学大学紀要, 13; 175-188,2009.
11) 河野あゆみ, 他: 大都市に住む一人暮らし高齢者のセルフケアを確立するための課題 高層住宅地域と近郊農村地域間の質的分析, 日本公衛誌, 56; 662-673, 2009.
12) 柄澤邦江,他: 独居高齢者における独居を継続できなくなった要因に関する研究, 飯田女子短期大学紀要, 25; 21-33, 2008.
13) 伊藤ふみ子,他: 社会的孤立に関わる支援者の観点「一人では対応が困難になっている,男性独居高齢者の社会的孤立への支援の検討, 淑大看栄紀要, 12; 69-77, 2020.
14) 小谷みどり: 孤立する男性独居高齢者の現状, 保健師ジャーナル, 5; 378-383, 2017.
15) 山浦晴男: 質的統合法によるデータ統合の進め方 質的統合法入門 考え方と手順 第1版, 23-78. 医学書院, 東京, 2012.
16) 正木治恵: 看護学研究における質的統合法(KJ法)の位置づけと学問的価値, 看研 ;41, 3-10, 2008.
17) 若山好美,他: 閉じこもり予防事業が高齢者にもたらす結果について-参加者と非参加者の主観的健康感・身体・精神状態・医療費の比較から-, 地域保健, 33; 59-67, 2002.
18) 安孫子尚子,他: 自主グループ活動に参加する独居高齢者の継続参加への意味づけ, 聖泉看護学研究, 6; 9-18, 2017.
19) 杉山由香里,他: 看護師の基礎的コミュニケーションスキルと援助的コミュニケーションスキルの関連性, 日本精神保健看護学会誌, 28; 12-20, 2019.
20) 大門恭平: 連載 科学的根拠に基づいた社会参加の意義と実際・第4回 社会参加と精神・心理機能の関係, 地域リハビリテーション, 13; 289-294, 2018.
21) 尹智暎,他: 高齢者における認知機能と身体機能の関連性の検討, 体力科学, 59; 313-322, 2010.
22) 浅野榛菜,他: 地域在住独居高齢者のQOLと社会・生活環境およびソーシャル・キャピタルについて, 北海道公衆衛生学雑誌, 31; 85－91, 2017.
23) 金子仁子: 地域組織活動からなるコミュニティ・エンパワメント 保健師活動の視座から, 日地域看護会誌, 22; 62-68, 2019.
24) 霜越多麻美: 地域組織活動の継続要因に関する文献レビュー: 看護学等,多領域にわたるscoping review, 千葉看会誌, 23; 1-9, 2018.